

体験版

田舎の冬は寒い。

生まれてから何度も経験しているはずなのに、慣れることはなかった。

東京はもっと寒かった。

いや、もっと別の寒さがあった。

駅の改札を抜けると、大勢の人が周囲に無関心なまま、あちこちへ流れていく。

色んな目をした人がいたが、その中には死んだ魚のような目をした人も多かった。

無機質に立ち並ぶビル。

人、車、電車。

それが、東京の朝の光景だった。

大学進学を機に東京へ出た頃は、見るもの全てが新鮮で、胸が高鳴っていた。

だが、慣れてしまえば、どうということもない。

そこにあるのは、冷たく無機質なもののばかりだった。

今の私の生活には、それがない。

見えるのは、どこまでも広がる田畑と、ぽつぽつと建つ民家。

たまに見かける泥だらけの軽トラさえ、なぜか愛おしく思える。

外へ出た時に吸い込む空気も、美味しかった。

「やっぱり、私はこっちの方が向いてるのかな……」

白い息と共に、ぽつりと呟く。

ある朝。

私はパジャマ姿のまま、二階の自室から一階へ下りた。

「……おはよう」

目をこすりながらリビングへ向かう。

すると、珍しく父がいた。

しかも、ただいるだけではない。

真剣な顔をしていた。

地元で公務員をしている父は、普段なら私より早く家を出ているはずだ。

向かいには母も座っている。

どこか落ち着かない様子で、表情が硬い。

嫌な空気だった。

自然と、胸の奥がざわつく。

「どうしたの？」

そう問いかけると、父がゆっくりこちらを向いた。

「喜美……」

その顔には、複雑な感情が浮かんでいた。

哀れみ。

同情。

けれど、それだけでもない。

うまく言葉にできない何か。

「どうしたの、お父さん？ 何かあったの？ 仕事は？」

「今日は休暇を取った。喜美も休め」

「えっ……どうして？」

「いいから、取りなさい」

低く、強い口調だった。

「この町には昔から、“成人の儀式”というものがあるらしい」

父は、重たい声でそう言った。

「それは、この小さな町で、童貞のまま成人式を終えた青年を“大人にするため”の儀式だ」

つまり――。

「選ばれた女性が、その青年たちと性行為を行う風習……らしい」

頭の中が、一瞬真っ白になった。

「……あるのは知ってた」

小さい頃、噂話みたいに聞いたことはある。

けれど、まさか。

「それで……私が選ばれたってわけ？」

「……そういうことだ」

「お父さん、いいよ」

「……えっ？」

「私がやれば済む話なんでしょ？」

部屋の空気が止まった。

「それを避けるためだけに、この家も、お父さんの仕事も捨てるなんてもったいないよ」

「喜美……本当にいいの？」

母が、不安そうに問いかける。

私は小さく笑った。

「うん、いいよ」

もちろん、不安はある。

今まで、好きな人以外と体を重ねたことなんて、一度もなかったからだ。

でも――。

「二十歳を過ぎても、まだ女性経験のない子たちなんでしょ？」

私は静かに言った。

「……正直、可哀想だなって思う」

そして、当日。

黒塗りの高級車が、静かに家の前へ停まった。

私は、白い息を吐きながら、その車を見つめる。

――もう、後戻りはできない。

【続きは本編でお楽しみください】